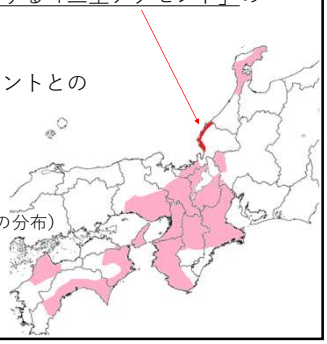
福井県方言の三型アクセントの成立過程

NINJALシンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」
2020年12月19日
松倉昂平（金沢大学／JSPS特別研究員PD）

研究の概要・目的

- 目的：福井県沿岸部に分布する「三型アクセント」の成立過程を明らかにする
- 近世以降の中央語のアクセントとの関係にも言及する

（右図ピンク：中央式アクセントの分布）



福井県方言に注目する理由

- 「三型アクセント」とは：語の長さが増えても型の数が最大３種類までしか増えない体系（上野善道1984, 2012）
- 類型論的に見て日本語諸方言の中では稀少な体系（隠岐と福井にのみ分布）

（1）日本語諸方言のアクセント体系の類型（上野善道1989に基づく）

- 多型アクセント
  - 「式」あり　（京都、高知）
  - 「式」なし　（東京、金沢）
- N型アクセント
  - 三型アクセント　（隠岐、福井）
  - 二型アクセント　（鹿児島、福井）
  - 一型アクセント　（都城）

- 一方で琉球諸語には広く三型が分布する

解決すべき問題・アクセント史研究への示唆

- 「福井県の三型アクセントはどこから来たのか」
- 日本語アクセントの２大類型：
  - 「N型アクセント」と「多型アクセント」（上野善道1984, 2012）

  両者の歴史的な連続性を捉える
- 九州二型・隠岐三型は中央語との系統分岐の時期がかなり古い（中世以前）が、福井三型は比較的新しい（近世以降）可能性がある　→　アクセント体系の共時論的な枠組みの変化は起きる時には迅速に起きる（共時論的な隔たり ≠ 系統的な隔たり）

発表の構成

1．取り上げる方言について
2．系統関係のあらまし
3．三型アクセントの成立過程
　　―福井市鮎川方言に注目して―
4．中央語のアクセントとの系統関係

1．取り上げる方言について

取り上げる方言

▲三型アクセント（鮎川）

（2）福井市鮎川方言の音調（松倉2017）

A	ニワ	サカナ	カミナリ	カザグルマ
		ニワカ	サカナガ	カミナリガ
B	ヤマ	ココロ	アサガオ	ネズミイロ
		ヤマガ	ココロガ	アサガオガ
C	マド	ハタケ	アマザケ	イトグルマ
		マドガ	ハタケガ	アマザケガ

- A 型＝２拍目と３拍目が高い／B 型＝１拍目と３or４拍目が高い／C 型＝１拍目か２拍目が高い
- 高音調が語頭から数えた位置に固定される

★下降式音調を有する多型アクセント

- 下降式（F）と非下降式の２種類の式と、下げ核の有無・位置が対立する多型アクセント
- 下降式音調：２拍目の後に半下降が生じる

（3）石川県白山市白峰方言の音調（新田哲夫2006）

F0	カー	カゼ	サカナ	アサガオ	（蚊）
0	テー	カタ	ウサギ	ハリガネ	（手、肩）
1	ヒー	ハナ	ムスメ	ネーサン	（日、花）
2			オトナ	クチビル	
3				ムラサキ	

※破線（……）は中程度の高さを表す

★下降式音調を有する多型アクセント

- 分節音がアクセントに影響を与えて複雑化した方言

（4）石川県小松市大杉方言の音調

F0	カー	ミズ	クルマ	ハイイロ	（蚊）
F0′		ニワ	サカナ	ニワトリ	
F3			ナギサ	オーガワ	（大川）
F3′				イロガミ	
F4′				アサガオ	
0	メー	フネ	ウサギ	ハリガネ	（芽）
1	ハー	ヤマ	チミダ	カミサマ	（葉）
1′			ココロ	ココノツ	
2		マド	タカラ	ハザクラ	
3			ハタケ	ムラサキ	
4				マナイタ	

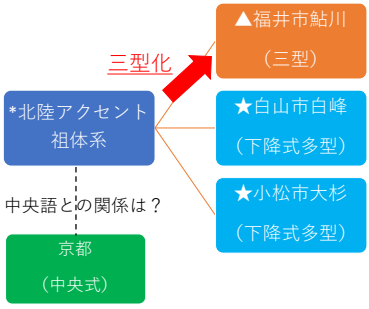
2．系統関係のあらまし

多型と三型の関係

- 変化の方向：多型＞N 型

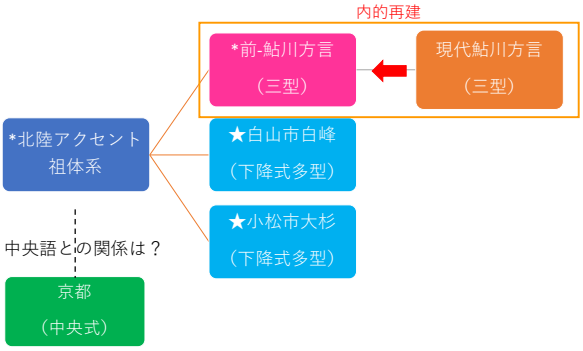
下降式音調を有する多型アクセント ⇨ 三型アクセント

もう少し詳しく示した系統関係



3．三型アクセントの成立過程
―福井市鮎川方言に注目して―

*前-鮎川方言の内的再建



鮎川方言の不規則性

（2）福井市鮎川方言の音調（松倉2017）

A	ニワ	サカナ	カミナリ	カザグルマ
B	ヤマ	ココロ	アサガオ	ネズミイロ
		ヤマガ	ココロガ	アサガオガ
C	マド	ハタケ	アマザケ	イトグルマ
		マドガ	ハタケガ	アマザケガ

- 3拍以上のA型のみ高い拍が2拍連続
- 3拍以下のB型語のみ助詞を付けるとHの位置が動く（ココロ → ココロガ）
- 3拍以上のB型は2か所に音調の山が現れる
- C型は語の長さによってHの位置が変わる

音調変化の一方向性

- 特別な音韻論的条件が関わらない限り、逆行的な音調拡張よりも順行的な音調拡張の方が起こりやすい（金田一春彦（1954[1975]）における「高さの同化の法則」「アクセントの山後退の法則」， Hyman & Schuh（1974））
- 語頭から2拍以上低音調が続く環境において語頭拍に高音調が発生する変化（#LL…＞#HL…）は、その逆の変化、高音調の消失（#HL…＞#LL…）よりも起こりやすい（「語頭隆起の法則」）

*前-鮎川方言の内的再建

（2）現代鮎川方言の音調

A	ニワ	サカナ	カミナリ	カザグルマ
B	ヤマ	ココロ	アサガオ	ネズミイロ
		ヤマガ	ココロガ	アサガオガ
C	マド	ハタケ	アマザケ	イトグルマ
		マドガ	ハタケガ	アマザケガ

語頭隆起（#LL＞#HL）の結果

- A型＝2拍目と 3拍目が高い
- B型＝1拍目と3 or 4拍目が高い
- C型＝1拍目か 2拍目が高い

かつては1～3拍目にあったHが1拍後退・拡張した結果？

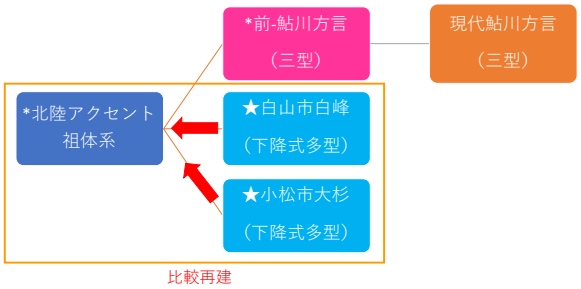
*前-鮎川方言の内的再建

（5）*前-鮎川方言の音調

A	*ニワ	*サカナ	*カミナリ	*カザグルマ
B	*ヤマ	*ココロ	*アサガオ	*ネズミイロ
		*ヤマガ	*ココロガ	*アサガオガ
C	*マド	*ハタケ	*アマザケ	*イトグルマ
		*マドガ	*ハタケガ	*アマザケガ

- A 型＝２拍目／B 型＝３拍目／C 型＝１拍目に核がある
- 「三型アクセントはどのように生まれたのか？」という曖昧な問いが「４拍目以降に核が置かれる型や無核型を失った経緯は？」という具体的な問題に置き換えられる

*北陸アクセント祖体系へのアプローチ



「類別語彙」の比較（２拍名詞）

		★大杉	★白峰	*前-鮎川方言
1類	庭	ニワガ（F0）	ニワガ（F0）	*ニワガ（A=2）
2類	川	カワガ（1）	カワガ（1）	*カワガ（B=3）
3類	山	ヤマガ（1）	ヤマガ（1）	*ヤマガ（B=3）
4類	舟	フネガ（0）	フネガ（0）	*フネガ（C=1）
5類	窓	マドガ（2）	マドガ（0）	*マドガ（C=1）

- ★大杉：１／２３／４／５　（F0/1/0/2）
- ★白峰：１／２３／４５　（F0/1/0）
- ▲三型：１／２３／４５　（A=2/B=3/C=1）

※各類の所属語彙は金田一春彦（1974）、国語学会編（1980）に基づく

「類別語彙」の比較（３拍名詞）

		★大杉	★白峰	*前-鮎川方言
1類	魚	サカナ（F0）	サカナ（F0）	*サカナ（A=2）
4類	頭	アタマ（2）	アタマ（1）	*アタマ（A=2）
3類	ニ＋	ハタチ（1）	ハタチ（1）	*ハタチ（B=3）
5類	心	ココロ（1）	ココロ（1）	*ココロ（B=3）
6類	兎	ウサギ（0）	ウサギ（0）	*ウサギ（C=1）
7類	畑	ハタケ（3）	ハタケ（0）	*ハタケ（C=1）

- ★大杉：１／４／３５／６／７　（F0/2/1/0/3）
- ★白峰：１／３４５／６７　（F0/1/0）
- ▲三型：１４／３５／６７　（A=2/B=3/C=1）

*北陸アクセント祖体系の再建

	*北陸祖体系	★大杉	★白峰
1類 庭	*ニワガ（F0）	ニワガ（F0）	ニワガ（F0）
2類 川	*カワガ（F1）	カワガ（1）	カワガ（1）
3類 山	*ヤマガ（F1）	ヤマガ（1）	ヤマガ（1）
4類 船	*フネガ（L0）	フネガ（0）	フネガ（0）
5類 窓	*マドガ（L2）	マドガ（2）	マドガ（0）
1類 魚	*サカナ（F0）	サカナ（F0）	サカナ（F0）
4類 頭	*アタマ（F2）	アタマ（2）	アタマ（1）
3類	*ハタチ（F1）	ハタチ（1）	ハタチ（1）
5類 心	*ココロ（F1）	ココロ（1）	ココロ（1）
6類 兎	*ウサギ（L0）	ウサギ（0）	ウサギ（0）
7類 畑	*ハタケ（L2）	ハタケ（3）	ハタケ（0）

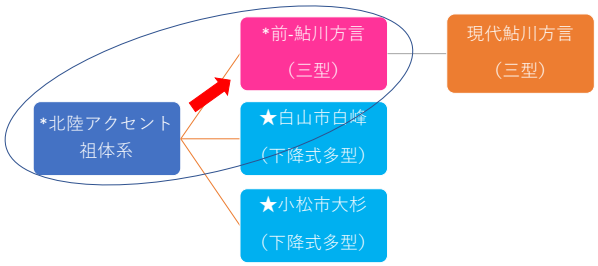
*北陸アクセント祖体系の再建

（6）*北陸アクセント祖体系

F0	*ニワガ	*サカナガ	*ニワトリ	語頭拍から高く始まる高起下降式（F）
F1	*ヤマガ	*ココロガ	*カミサマ	
F2		*アタマガ	*イモート	
F3			*カミナリ	
L0	*フネガ	*ウサギガ	*アマザケ	語頭拍が常に低い低起上昇式（L）
L2	*マドガ	*ハタケガ	*ムラサキ	
L3			*マナイタ	

- 語頭から高く始まり２拍目の後に小さな下降が生じる高起下降式（F）と語頭が常に低い低起上昇式（L）の２つの式が対立
- 語音構造のアクセントへの影響はなし

*前-鮎川方言の成立過程



*北陸祖体系と*前-鮎川方言の比較

（6）*北陸アクセント祖体系

F0	*ニワガ	*サカナガ	*ニワトリ	A型（2型）
F1	*ヤマガ	*ココロガ	*カミサマ	B型（3型）
F2		*アタマガ	*イモート	A型（2型）
F3			*カミナリ	
L0	*フネガ	*ウサギガ	*アマザケ	C型（1型）
L2	*マドガ	*ハタケガ	*ムラサキ	
L3			*マナイタ	

*北陸祖体系｜三型　＝ F0, F2, F3型｜A型
　　＝ F1型　　｜B型
　　＝ L0, L2, L3型｜C型

*北陸祖体系から*前-鮎川方言へ

（7）中間祖体系①

F0	*ニワガ	*サカナガ	*ニワトリ	A型（2型）
F2	*ヤマガ	*ココロガ	*カミサマ	B型（3型）
F3		*アタマガ	*イモート	A型（2型）
F4			*カミナリ	
L0	*フネガ	*ウサギガ	*アマザケ	C型（1型）
L3	*マドガ	*ハタケガ	*ムラサキ	
L4			*マナイタ	

- 生じた変化：
  ①全ての核が１拍後退（結果、F1型とL2型を欠く体系に）
  ②低起式の上昇位置が後退（#ＬＨ…＞#ＬＬ…）

*北陸祖体系から*前-鮎川方言へ

（8）中間祖体系②（三型化直前の体系）

F0	*ニワガ	*サカナガ	*ニワトリ	A型（2型）
F2	*ヤマガ	*ココロガ	*カミサマ	B型（3型）
F3		*アタマガ	*イモート	A型（2型）
F4			*カミナリ	
L0	*フネガ	*ウサギガ	*アマザケ	C型（1型）
L3	*マドガ	*ハタケガ	*ムラサキ	
L4			*マナイタ	

- 生じた変化：
  ①下降式の句頭拍が低下（#ＨＨ＞#ＬＨ）
  ②低起式に「語頭隆起」（#ＬＬ＞#ＨＬ）
  → 句頭をＬＨ or ＨＬにそろえ句の境界を明示する変化

*北陸祖体系から*前-鮎川方言へ

（9）*前-鮎川方言

2	*ニワガ	*サカナガ	*ニワトリ	A型（2型）
3	*ヤマガ	*ココロガ	*カミサマ	B型（3型）
2		*アタマガ	*イモート	A型（2型）
			*カミナリ	
	*フネガ	*ウサギガ	*アマザケ	C型（1型）
1	*マドガ	*ハタケガ	*ムラサキ	
			*マナイタ	

- 生じた変化：
  ①２拍目にあった核が１拍後退
  ②重起伏の解消＆句頭のＨが核と解釈される
  ③下降式音調の有核化（ＨＭ＞ＨＬ）

三型アクセント成立の要点

- 問題：　*前-鮎川方言の体系の成立時、４拍目以降に核が置かれる型と無核型を一切失っていた経緯は？
- 下降式音調の有核化（10）により、下降式にあった核の有無・位置の対立が全て消えた

（10）三型化直前　　*前-鮎川方言

*○○○○○　＞　*○○○○○（２型＝Ａ型）
*○○○○○　＞　*○○○○○（２型＝Ａ型）
*○○○○○　＞　*○○○○○（２型＝Ａ型）

- 上野（2012: 57, 59）では九州二型のＡ型や隠岐三型のＡ型の成立にも（10）と同様の変化が想定される

- 低起式に生じた語頭隆起（#ＬＬ＞#ＨＬ）とこの語頭のＨＬを下げ核として再解釈する変化（11）により、低起式にあった核の有無・位置の対立が全て消えた

（11）三型化直前　　*前-鮎川方言

*○○○○○　＞　*○○○○○（１型＝Ｃ型）
*○○○○○　＞　*○○○○○（１型＝Ｃ型）
*○○○○○　＞　*○○○○○（１型＝Ｃ型）

- 金田一（1954）では「東京式」の成立過程に（11）とほぼ同様の変化を想定
- 答え：　式音調・句音調が変質して新たに生じた核が、三型化以前の祖体系にあった核の有無・位置の対立を消し去ったから（下降式の有核化と低起式の有核化が重なった点が重要。どちらか片方だけなら「式の区別のない多型アクセント」が生まれる）

４．中央語のアクセントとの系統関係

*北陸祖体系と中央式の比較

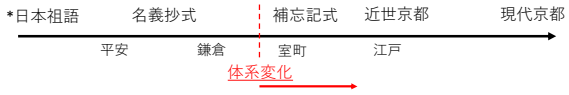
	*北陸祖体系	高知市方言（中井幸比古1997）
1類 庭	*ニワガ（F0）	ニワガ（H0）
2類 川	*カワガ（F1）	カワガ（H1）
3類 山	*ヤマガ（F1）	ヤマガ（H1）
4類 船	*フネガ（L0）	フネガ（L0）
5類 窓	*マドガ（L2）	マドガ（L2）
1類 魚	*サカナ（F0）	サカナ（H0）
4類 頭	*アタマ（F2）	アタマ（H2）
3類	*ハタチ（F1）	ハタチ（H1）
5類 心	*ヨコロ（F1）	ヨコロ（H1）
6類 兎	*ウサギ（L0）	ウサギ（L0）
7類 畑	*ハタケ（L2）	ハタケ（L2）

高始まりの式の音調が若干異なる：
*北陸＝下降式（HHM…）
中央式＝平進式（HHH…）

両体系で２拍２・３類，３拍３・５類がＨＬＬ型に合流
→両体系の共通改新？

*北陸祖体系と中央式の比較

- ２拍名詞２類と３類、３拍名詞３類と５類の合流（いわゆる「体系変化」の結果）が中央式と*北陸祖体系の共通改新であるならば、両者の系統分岐は中央語における「体系変化」（14世紀頃）以後



- ただし中央語とは無関係に偶然同じような変化、同じ類の合流が起きた可能性を否定できない

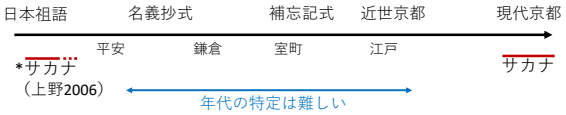
*北陸祖体系と中央式の比較

- 上野（1988, 2006）は日本語のアクセント祖体系における高起群の式音調として下降式（HHM…）を想定

→　下降式と平進式の新旧関係は「下降式＞平進式」

→　中央語のアクセントと*北陸アクセント祖体系の分岐は中央語における式音調の変化（下降式＞平進式）以前

- 中央語で下降式＞平進式の変化が起きたのはいつか？



今後の課題

- 越前町小樟方言（新田2012）、坂井市三国町安島方言（松倉・新田2016）、あわら市北潟方言（松倉2014）など福井県内の他の三型アクセントの成立過程、三型アクセント方言同士の系統関係
- 北陸諸方言のアクセントは中世以降の中央語のアクセント（中央式アクセント）と同じ系統にまとめられるか？そもそも北陸地方の諸方言を同じ系統にまとめられるのか？根拠となる共通改新を探す

謝辞

この発表はJSPS特別研究員奨励費「北陸諸方言の音韻・文法体系の記述的研究」（19J00755）の研究成果の一部です

ご視聴ありがとうございました

参考文献

上野善道（1984）「N型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会（編）『現代方言学の課題２ 記述的研究篇』167–209, 明治書院.

上野善道（1988）「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集’88』35–73.

上野善道（1989）「日本語のアクセント」『講座　日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻（上）』178–205.

上野善道（2006）「日本語アクセントの再建」『言語研究』130, 1–42.

上野善道（2012）「N型アクセントとは何か」『音声研究』16 (1), 44–62.

金田一春彦（1954）「東西両アクセントのちがいが出来るまで」『文学』22 (8), 63–84.

金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究　原理と方法』塙書房.

金田一春彦（1975）『日本の方言　アクセントの変遷とその実相』教育出版.

国語学会（編）（1980）『国語学大辞典』東京堂出版.

中井幸比古（1997）『高知市方言アクセント小辞典』科研費報告書.

新田哲夫（2006）『石川県白峰方言の調査研究と方言語彙のデータベース化』平成16～17年度科研費報告書.

参考文献

新田哲夫（2012）「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』16 (1), 63–79.

松倉昂平（2014）「福井県あわら市のアクセント分布」『東京大学言語学論集』35, 141–154.

松倉昂平（2017）「福井市西部沿岸部及び東部山間部のアクセント分布」『東京大学言語学論集』38, 101–122.

松倉昂平・新田哲夫（2016）「福井三型アクセントの共時的特性の対照」『音声研究』20 (3), 81–94.

Hyman, Larry M. & Schuh, Russel（1974）Universals of tone rules: Evidence from West Africa. *Linguistic Inquiry* 5, 81–115.

（補足）隠岐三型との関係

- 島根県隠岐方言の三型アクセントは福井県の三型アクセントと異なる系統に属すると見る
- 平安･鎌倉期京都アクセントで上平平型である語が異なる型に対応する：

（12）上平平型の語の対応

	隠岐三型	福井三型	
二十歳、力	A型	B型	（3拍3類名詞）
置いた、上げた	A型	B型	（1類動詞タ形）

- 隠岐では平安京都における上声始まりの語がA型に対応する。一方福井では上平平型がB型に対応

（補足）*北陸祖体系から*前-鮎川方言へ

↓三型化

	*北陸祖体系	①	②	*前-鮎川方言
1類	*サカナ（k0）	*サカナ（k0）＞	*サカナ（k0）＞	*サカナ（2=A）
4類	*アタマ（k2）＞	*アタマ（k3）＞	*アタマ（k3）＞	*アタマ（2=A）
5類	*ココロ（k1）＞	*ココロ（k2）＞	*ココロ（k2）＞	*ココロ（3=B）
6類	*ウサギ（L0）＞	*ウサギ（L0）＞	*ウサギ（L0）＞	*ウサギ（1=C）
7類	*ハタケ（L2）＞	*ハタケ（L3）＞	*ハタケ（L3）＞	*ハタケ（1=C）
		・核が１拍後退 ・上昇の後退 （#ＬＨ＞#ＬＬ）	・語頭隆起 （#ＬＬ＞#ＨＬ） ・語頭低下 （#ＨＨ＞#ＬＨ）	・下降式音調の有核化 ・重起伏の解消 ・ＬＨＬ＞ＬＬＨ

（補足）*北陸祖体系から*前-鮎川方言へ

↓三型化

*北陸祖体系	①	②	*前-鮎川方言
*ニワトリ（k0）	*ニワトリ（k0）	*ニワトリ（k0）	*ニワトリ（2）
*カミナリ（k3）	*カミナリ（k4）	*カミナリ（k4）	*カミナリ（2）
*イモート（k2）	*イモート（k3）	*イモート（k3）	*イモート（2）
*カミサマ（k1）	*カミサマ（k2）	*カミサマ（k2）	*カミサマ（3）
*アマザケ（L0）	*アマザケ（L0）	*アマザケ（L0）	*アマザケ（1）
*マナイタ（L3）	*マナイタ（L4）	*マナイタ（L4）	*マナイタ（1）
*ムラサキ（L2）	*ムラサキ（L3）	*ムラサキ（L3）	*ムラサキ（1）
	・核が１拍後退 ・上昇の後退 （#ＬＨ＞#ＬＬ）	・語頭隆起 （#ＬＬ＞#ＨＬ） ・語頭低下 （#ＨＨ＞#ＬＨ）	・下降式音調の有核化 ・重起伏の解消 ・ＬＨＬＬ＞ＬＬＨＬ

（補足） *前-鮎川方言から鮎川方言へ

	*前-鮎川方言						鮎川方言
A 型	*ニウ		*ニウ		*ニウ		ニウ
	*サカナ		*サカナ	>	*サカナ		サカナ
	*カミナリ		*カミナリ	>	*カミナリ		カミナリ
B 型	*ヤマ		*ヤマ		*ヤマ		ヤマ
	*ココロ	>	*ココロ		*ココロ	>	ココロ
	*アサガオ	>	*アサガオ	>	*アサガオ	>	アサガオ
C 型	*マド		*マド		*マド		マド
	*ハタケ		*ハタケ	>	*ハタケ		ハタケ
	*アマザケ		*アマザケ	>	*アマザケ		アマザケ
			下降・上昇後退（B 型）		下降後退（3 拍以上）		語頭隆起（#LL > #HL）